

1月12日講演会補遺

平和統一 NEWS No. 66 (2014/2月号)

渡辺 久義

私のこれまでの経験では、ケムトレイルという“怪奇”現象について人に話すとき、「実は私もあれは何だろうと思っていました」という答えの返ってきたことは一度もない。空を見上げるということは普通あまりないのかもしれない。しかしそれにしても不思議である。外出するときは、天候判断に誰でも一度は空を見上げる筈だからである。これはおそらく「あってはならないものがある筈がない」という先入観が働くのではなかろうか？ それが見えたとえ目の前にあっても同じである。見えてはならないものが見える筈がない。だから、それが見えた私こそ否定されるべきである。これは困ったことになる。これでは世の中は停滞したままである。新しい発見も、新しい見方も生まれてこない。それが最も顕著なのは、一般の考えに反して学問の世界である。

ケムトレイルと呼ばれる空の雲が、飛行機雲でないことは誰にでもすぐわかる。自然現象でないこともわかる。だから誰かが、何らかの目的で、何かを散布しているのでなければならぬ。しかしこれに対する一般の反応は、「そんなバカなことをする人間がいる筈がない」ということであろう。そしてこの態度が一般の風潮として、軽蔑的な「陰謀論」という言葉になっている。「陰謀論」とは、陰謀などない所に陰謀を見ようとする、反社会的な連中の流すうわさ、という意味である。しかし「そんなバカな悪いことをする人間がいる筈がない」のであれば、なぜ、我々の不安と心配を晴らすような公的説明が、どこからも一言もないのだろうか？

先日の講演で、私がぜひ見るべきだと言った、思い出せなかったユーチューブの題は「ケムトレイル集中散布（1－8）」だった。ある女性がこの不可解な空の現象について、各省市に電話で問い合わせるが、応答する人たちは当惑するばかりで、答えたくない、答えられない、という態度がはっきりわかる。これは世界中同じであって、我々の「創造デザイン学会」サイトの幾つかの最近の記事を見ていただければわかる。「ケムトレイル——人類に対する隠れた犯罪」ではこう言っている——「彼らは民衆の意向を全く顧みることなく、すべてを決定してきた。彼らはこの現行のシナリオを、これらの隠れたプログラムに責任をもつ、たった一つの部局も一人の意思決定者もないように、前もって計画し操作してきた。のみならず彼らは、これを通常のコントレイル（飛行機雲）だとして、強情にその存在そのものを否定し続けてきた。」

アメリカでさえこうであるのだから、日本政府などが責任をもって答えられるはずがない。「堂々と隠れてやる」というのが彼らのやり方だと言われるが、まさにその通りにやっている。この引用の少し先で、彼らの御用学者がいて、テレビなどで「彼らがやっていないとさえ主張することを正当化しようとするとき、事態はますます霧に包まれたものになる」と言っている。要するに、やってはいない、しかしやったと発覚して何が悪い？ということであろう。

もう一つの記事「**ケムトレイル症候群——地球規模の大疫病**」では、ケムトレイルによって引き起こされたと考えられる症状と、散布される毒性化学物質や細菌を列挙している。前者は因果関係の厳密な立証はできないかもしれないが、後者は事実なのだから、こういうことを全く無視する新聞やテレビは、犯罪に加担していると言ってもよいだろう。UFOやミステリー・サークルは報道しなくても命に関わりはないが、こちらは命に関わる。

先日、もう一つ言い忘れたが、ドキュメンタリーWhat in the World Are They Spraying? (いったい彼らは何を撒いているのだ?) には、日本語付きのがないようだが、Why in the World Are They Spraying? には、日本語字幕付きがあるから見ていただきたい。しかし、こういうことに無関心でいられる人々が、圧倒的に多いということは不思議なことである。知ってもどうしようもないことなのだから、知らぬが仏を通すのがいいということであろうか? 『これが人殺し医療サギの実態だ』の船瀬俊介氏のギャグを借りるならば、これこそ「知らぬが仏になる」道であろう。

「**ケムトレイル——人類に対する隠れた犯罪**」は「第一に責任を問われるのは、自国民に対する連日の化学攻撃を許している世界の各国政府である」と言っている。これはごく最近、新聞に小さく出た、厚生労働省の子宮頸がんワクチンに対する態度変更を思い出させる。この評判の悪いワクチンは勧めない方針を取っていたが、やはり副作用との因果関係が立証されないので、再び勧めることにした、という内容の記事であった。何らかの外からの圧力がなければ、こんな恐ろしい決断はしないであろう。「人口削減」割り当てのノルマが日本へも来ていると考えられる。この種の思い当たるフシはこの他、テレビや新聞にもいろいろある。たとえば「ダーウィン」は、優生学を通じて、彼らにとって極めて貴重な道具であることを忘れてはならない。